

## チェンマイ大学での貢献 (59)

伊藤信孝

チェンマイ大学客員教授・工学部

例年のことではあるが、今年（2018）も3月はじめ（3月1日）に托鉢の行事があり参加した。本シリーズでも既に紹介をしているかと記憶するが、タイでは3種類の祝日がある。すなわち一般的な国民の祝日として1）仏教的な祝日、2）王室に関わる祝日、3）その他ごく一般的な国家の祝日、である。上述の托鉢は文字通り仏教由来の行事であり、大学でも学長をはじめ要職にあるVIPが組織を上げて参加する行事である。朝の6時という早朝から大学のキャンパスの目抜き通りの両側に”ゴザ”が敷かれ、大学人のみならず、キャンパス外からも一般市民がお供え物を持ってやってくる。大学のキャンパスに近い所に位置する寺院から僧侶の一行が目抜き通りを托鉢容器を手にして列を成して歩いてこられる。この行事はマガプラジャ(Ma-gha-pu-laja)とよばれる。ちなみに日本語では托鉢(たくはつ)と言うがタイ語ではタクバツと言う。この一向に先駆け、僧侶の代表的地位にある一人が学長の儀式に則った挨拶の後にお経を上げ祈禱する。学長は代表の僧侶に出向く前に蠟燭に火をともし儀式が始まる。僧侶の代表(約10名)は目抜き通りを挟んで特別に用意された一段高い部所に鎮座し、大学関係者はそれに対峙する形で用意されたテント下の椅子に座る。早朝だから朝食を取らずに駆けつける人のために軽い朝食が振る舞われる。揚げパンに似た「パトンコ, Patong Ko」と言う食べ物と暖かいソイビーン・ミルク(Soybean milk, 大豆で作ったミルク)である。隣国ラオスでも同様である。学長を含むVIPの近辺では長机が用意され、その上にお供え物を置き、前を通行する僧侶の一人一人に供え物を入れて渡す。100メートル余の距離に渡り道路の両側に敷かれたゴザに座る大衆の数は多い。たちまちのうちに僧侶の托鉢容器は一杯になるので常に付き添いの係が僧侶から受け取り大きな袋に集める。約2時間ほどで托鉢の行事は終わるが、いつも感動を覚える事がある。VIP席を除き、他に長机は用意されていない。大衆は全てゴザに直接座し、僧侶一行のお出ましを待ち受ける。僧侶の中には未だ小学生や中学生の修行僧もいる。朱黄色の衣装をまとい素足で托鉢桶を脇に抱えて通りかかる僧侶に一般大衆がひざまずいて供物をお供えすると言う光景はいつ見ても心を打たれる。普通に考えれば、供物を与える側が高い位置に位置し、施される側が低い位置にある事になっている現代人にはあまりその意味を深く考える様子はないように思える。国王であり国の指導者であれば、施す側がひざまずいて差し上げると言う構図は理解できるが、理由の如何に関わらず年の若い修行僧にさえ頭を下げてかきずき供物を供える大衆の姿に筆者は毎年感動を覚える。なぜなら本当に心からお供えをするという汚れのない純真な心意外に何も見えないからである。アジアは食料を大量に生産している世界でも有数の食料圏であるが、苦労も無く容易に毎日食料にありつけることへのありがたみを感じている人がどれだけ居ることであろうか。空気も食料も一度困難に遭遇するとその存在のありがたみを痛感し、「なぜ早く気がつかなかったのか」と後悔もする。同じ仏教国でも時代と共に習慣や考え方も変わる。タイのみならずアジアの仏教国の人々がどこまでそうした慣習を理解して継続しているのか筆者は知り得ないが日本では既に忘れ去られた貴重なものをタイでは再発見する事が出来る。こうした行事に参加すること、いや参加できることが新しい発見であり生きる方向への心構えを示唆してくれる。国際交流事業が大学の評価の目玉の一つになって居るが参加する大学生が

どこまでそうした事にまで興味を持ち、自身のモチベーションを高めてオファーされた事業に積極的に臨んでいるかは疑問である。必ずしも筆者の考えが全てでないで、それを強制する意図はないが、残念ながら周囲を見渡すといろいろなプログラムが用意されており、モチベーションが差ほど高くなくても容易に参加できるほどに条件が整うと、目的もはっきりせずに大学が金を出してくれるなら言ってみようかと言う安易な発想が出てきても不思議ではない。また実績を上げることに固執するが故に「平気でそうしたレベルの学生を送り出す」大学やプログラムが如何に多いことであろうか。まさに予算の無駄使いである。大学が企画するプログラムの評価基準の一つは「きちんとした事業へのコンセプトや理念を理解・把握して居る責任者が居るかどうか」である。大半の事業の多くは「予算の切れ目が事業の終焉」である。はじめから事業を立ち上げ進めたいという気持ちは無く、「予算があるから立ち上げる」と言う逆のプロセスで発足している場合が多い。まずは何がやりたいか、「何をしても立ち上げたい、この事業の立ち上げによってこれだけの貢献が出来る、教育研究にも大きな利点がある、と言った押さえきれない気持ちが元で出てきた事業は少ないから、予算をどうしても工面せねばならないという必死の気持ちが前面に出てこない。目的もはっきりしないから、「それならばやめよう」という安易な決断が先行する。国際交流担当者がこのレベルの意識であるから、それ以上はない。対外的に活動を示すという実績造りに奔走して居るから事業はマンネリ化し、参加者にも新鮮なインパクトを与えられない。まさに恒例の年次行事化し、新しい企画も発案もない。またそうしたいという積極的な提案もその様な状況の下では生まれにくい。行き着くところはいつも決まって担当責任者自身の保身であり、予算獲得が優先している。事業の中身には全くと言って良いほど関心が無い。複数の大学間で運営するセミナー・シンポジウムにおいてもホスト大学としての役割や自覚を認識しない事業もある。確かに事業の継続はあるがシステムティック (Systematic) に、また事務的に執り行われているだけでホスト大学としての新しい提案も無ければ意見もない。基本的に事業に対する戦略 (Strategy) もポリシー (Policy) もない。ホスト大学としての提案が無いと言うことは事業に対する興味や関心が無いということにも通じる。ホスト大学として順番だからその役割を担うと言う以外にホスト大学としての責任感もプライドも意識は無く、順番だからやると言う低レベルの感覚と意識を有するリーダーが居ることは余りにも情けない限りである。なぜ自分の大学がホスト大学の資格を得ているのか、ホスト大学として「このような事を新しく提案したい」と言う積極性が全く視られない。交流事業がこのような事態に陥る原因は何かと言う答えは極めて明瞭である。事業に対する継続的積極性がないからである。ホスト大学としての役割が、3年または4年ごとに回ってくることは事業推進大学の間で合意しているのであるから、予算が工面できないなどと言う理由は通じない。大学は独立行政になったのであるから、予算を積み立てて来たべき年度まで蓄えておく手もある。いずれにしても何をやるかと言う積極性が無ければ動かない。予算が無いから事業をやめようと言う恥ずかしいことをよくも言えるなど筆者は大変驚きである。既述したようにやるべき事があってこそ予算の裏付けが必要となるのである。補助金が頂けないのなら事業はやらないと言う「上から目線」の考えがここまで来たかとの思いを隠せない。

話題が僧侶への托鉢から大学の国際交流事業に移ったが、筆者の意図するところは最終的には躰 (しつけ) 教育 (Discipline Education) につながる。供物を受ける僧侶と供物を捧げる側の姿勢を注視してみると、その奥にある荘厳なものを見いだすことができる。現地のタイ人がどの様にその慣習を視て、如何に理解しているのかはわからないが、現場で

行われている現状を見てどの様に感じ理解するかは最終的に個々の個人の判断に依存するが、その理解の仕方によって躰教育は良くもなり悪くも成る。筆者の場合はまさに感動そのものである。最近のタイの大学生をみても、筆者のような見方はして居ないようにも見える。さらに年代を上げて見て見ると学部長補佐などのレベルに至っても必ずしも昔の慣習を持ち続けている人は少ないように見える。タイでは長老を敬い、しかるべき時にはこのしきたりが大方の場合優先する。確かにそうした対応に度々遭遇したことがあるが、中には極めて無礼（または非礼）とも思われる仕草も目にしないこともない。折角の慣習が良い意味で継承され人間関係や組織の円滑な運営に寄与することを願う。なぜなら躰教育は最終的には一つの国の民度をも左右するからである。



Fig. 1 学長他 VIP の方々と一緒に撮影



Fig. 2 寺院から出て托鉢に臨む僧侶の一行



Fig. 3 僧侶の到来を正座して待ち受ける大衆（大学内の目抜き通りで）